西カリマンタン宣教の歴史

インドネシア福音教会主任牧師
初代西カリマンタン宣教師
安海靖郎師

「カリマンタンへの導き」

ちょうど50年前、当時浦和の教会の牧師をしていた1971年の牧師研修会で西カリマンタンの奥地で集団改宗と村々のキリスト教化の証を聞きました。その証の中での言葉、「何百何千人という村人が入信している、しかし、一年に一度か二度しか牧師のメッセージを聞けない。宣教師が必要」が心に深く刺さりました。

当時教会で、一週間に5―6回説教をしていた私は、本当にそんな所があるのなら、自分のような若い者が行くべきではないのか、という思いが心に迫りました。研修会の帰途、ケズィックコンベンションに出席し、そこで、み言葉を通して、主が語りかけるように不思議に心にカリマンタンへの導きを確信しました。その一つのみ言葉は、黙示録3章8節でした。その後家内にも、無牧の教会の大変さの経験を通して、宣教師への導きを主からのものと思うようになりました。教会の役員方の理解が進み、教会を挙げて派遣して下さることになりました。「先生にはお葬式をしてもらえると思っていたのに残念です。」という老姉妹の言葉が心に残りました。半年後、牧会を辞し浦和から宣教師訓練センターのあった高槻市に移り、デピュテーションを始めました。約一年間全国をまわり、200回程の集会(礼拝や諸集会)でカリマンタンへの宣教の証をさせていただきました。諸師、諸教会にお願いし証の機会を頂く経験は、何にも勝る謙遜と信仰の訓練、祝福です。宣教師にとっての必須の訓練、形成です。

1972年、家内と、3歳と9ヶ月の娘とともに伊丹空港を立ち、協力団体であるYPPII(インドネシア伝道協力会)本部のある、東部ジャワ州、バツ市に向かいました。そこで一年間、インドネシア語と文化を学ぶためです。しかし、当時、リバイバルの実としての沢山の献身者が、神学校で学んでおり、大変な教師不足です。本部にあるバツ神学校で、半年間のインドネシア語の学びのあとに、神学校の授業を一つ担当させられました、その半年後には、4科目です。苦労しましたが、後の働きのために大きな意味と益がありました。しかし、この状況が、カリマンタンへの障害となりました。校長から、「パ、(Mr.)安海、カリマンタンよりバツ神学校で教えてくれ」と強く要請されたのです。何百人の神学生に数人の神学部門教師という窮状を見て心うごかされない訳にはいきません。

しかも、大胆な気質のバタック人のこの校長は言うのです「日本人が、カリマンタンに入っても大海に一石のごとし、ここで教えた有能な神学生が、卒業後行った方がより効果的！安海は、ここで教えよ」というのです。正論です。まず、一度カリマンタンを見たいと卒業生の一人と、一ヶ月調査旅行に行く機会をもらいました。奥地の村々、信者の状況を実際に見ることができたのです。神学校の卒業生は、奥地に一人も奉仕していませんでした。机上の正論より現実です。バツの神学校では、その後一年だけ延長して教え、

―これも後の働き、ATI神学校開設のために大切な意味が有ったのですが―

宣教師当時の安海先生ご一家

こうして、1974年、目的の西カリマンタンに、バツで与えられた9ヶ月の長男が加えられて、一家5人と、神学校で一年だけ学んだ姉妹とで向かいました。涼しいバツから赤道直下の西カリマンタンです。そこは、正に主が門を開いて下さっているところでした。

(続く)

ワークキャンプから三年半

川上麻奈

Apa kabar? 皆さん、なかなか集会やキャンプ、個人的に交わりを持つのも難しい時期が続いていますがお元気にされているでしょうか。以前ワークキャンプというミッショントリップがあったのをご存知でしょうか？ワークキャンプは当時建設中だったグロリア寮Ⅰに行き、寮建設に関わる目的で行なわれ、有志で訪れました。その一つに寮までの道が雨季の雨で流されてしまわないように、根を張りやすいプチュクメラという木を植栽するというミッションがありました。乾季の暑い中、舎監や寮の子ども達と共に汗を流しながらジェスチャーでコミュニケーションを取りながら植樹したのは、忘れられない思い出となっています。植樹した際には30cmにも満たない苗木でしたが、現在では2m以上にもなる大木にまで成長しました。そして実際子ども達が通学で通る道が土砂で浸蝕されることの防止に繋がっています。あれから3年半が経過しましたが、植栽している時にはここまで大きくなるものだと思ってもいなかったので、こうして月日を経て大きな結びとなっていることをとても感謝しています。

2017年

2020年

あの時、一緒に植樹した子どもたちは寮を巣立っていきましたが、新しく入寮し御言葉によって成長していく子ども達の学びの道を守っていることに、主の計画の大きさを、国を越えて改めて感じる機会となりました。今はお互いに直接訪問して交わることができませんが、いつの日か主がまた共に礼拝する時を与えて下さると願っています。そして新たに大きな計画が進んでいくのだと信じ、待ち望みたいと思います。

※3月にこの通路で土砂崩れが起こりました。お祈りください。

西カリマンタン宣教の歴史　Vol.2

インドネシア福音教会主任牧師
初代西カリマンタン宣教師
安海靖郎師

「ATI神学校のスタート」

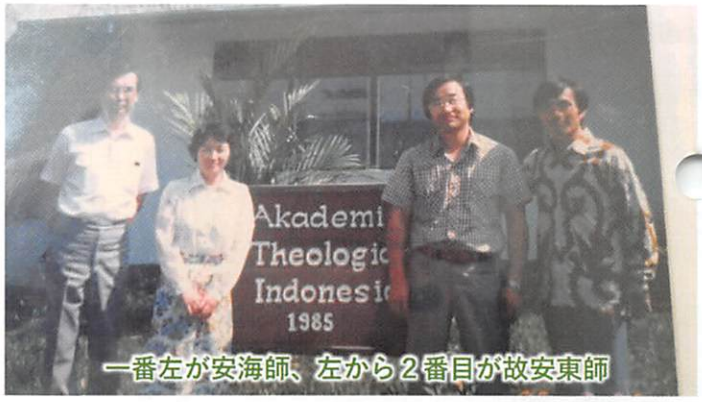
一地方、また一民族がキリスト教化されるには、歴史的に二つの理由があります。一つは、王や領主がキリスト教徒になり影響を与えていくケース。もう一つは、政治社会状況により多くの人が、キリスト教を受け入れるケースです。西カリマンタンは、この第二のケースです。1965年9月30日、インドネシア現代史上、最大の混乱が起りました。初代大統領スカルノの庇護のもと(ナサコム政策)増大した共産党が、対抗する陸軍の現役大将五人を殺害するクーデターを起こしました。(G―30―S事件、九月三十日事件)。これを制圧して反共軍事政権を立ち上げ、その後33年に渡って、反共独裁開発政治を敷いたスハルト大統領時代(新秩序時代―ニューオーダー)が訪れました。経済開発が進められる背後で徹底的な共産党狩り、虐殺がなされ、百万と言われる人が犠牲になりました。今日に至るまで、その詳細は不明なのです。このニューオーダー反共時代が、カリマンタンはじめ、未開未宗教の人々に宗教的な影響を与えたのです。建国五原則の第一条に「 神を信じる」とうたうインドネシアです。未開未宗教の人々が、共産主義に影響されないための防御として公認の宗教を持つことが政府によって勧められたのです。この西カリマンタンは、その中でもさらに、特別な政治的社会状況がありました。

西カリマンタンは、海を越えてシンガポール、マレー半島に面していますので、古くから中国大陸からたくさんの人々が住み着きました。この中国系の人々には、中国(共産主義)寄り、親共産主義も少なくありませんでした。そこに、ジャワ島から追われた共産党員が逃れたのです。ニューオーダー政権の最後の共産党狩り場として、中国系の人、奥地の未開未宗教のダヤク人への政治的圧力が続きました。このような状況のもと、共産主義者でない証として宗教を求めたのです。しかし、彼らはマジョリテイのイスラムにはなりにくいのです。大切な財産で、食糧の豚を食べられない宗教だからです。他の公認宗教のヒンズー教(主にバリ島)、仏教、ジャワ密教は、身近ではありません。どうせ宗教を持つなら、キリスト教の方がいいという流れです。ですから、奥地シンタン町に住んで村々を訪問しますと、かつては部族抗争で首狩りを行い、外からの者には毒を盛って試す閉鎖社会だった人々が、私達を歓迎して受け入れ、福音に耳を傾け信じる様になったのです。村々が、キリスト教化した背景です。今日、西カリマンタン州、人口約200万人の半分以上がキリスト教となりました。私達は、東部ジャワにある本部のバツ神学校から、毎年、卒業生、一年間の実習生を沢山を送ってもらい対処しましたが、とても間にあいません。長い祈りの末、西カリマンタンに牧会の出来る牧師を養成出来る神学校を、バツ神学校の姉妹校として始める道が開かれました。

設立初期のATI神学校

1982年、8年間奉仕した奥地のシンタンを後にし州都ポンテアナックに移り、土地探しを始めました。そのかたわら、不思議な主の導きでポンテアナックの大きな中国系の教会の牧師として奉仕することになったのです。そこで、多くの情報と有力な人脈を得ることができました。状況は整い、土地の候補地もでてきましたが問題は資金です。信仰団体(フェイス、ミッション) の方式を取るYPPII ですので、公に必要をアピールすることもままならず、皆で祈り続けました。そこに、夏休みに一ヶ月間教育宣教師として来てくれた、岡山大学医学部の学生だった土居兄が帰国後、カリマンタンでの神学校の必要を教会で証ししました。それを聞いたK 姉が心動かされ、自分の老後の蓄え預金から400万円献金下さったのです。若い時に献身の思いが与えられていたのにかなわず、看護師として働いてきた自分にできる恵みとしてお献げ下さいました。この献金でダヤク人の地域の入り口、アンジュンガンにATI 神学校の最初の土地購入が出来たのです。

1989年に帰国した私達に代わって、アンテオケ宣教会から故安東栄子宣教師が遣わされて、この生まれたてのATI 神学校の初期形成期に奉仕されましたが、神学校の第一回卒業式の翌日、交通事故で召されました。悲しみと苦渋の中で、主の御旨を求めました。主は、この安東宣教師の殉死の証しを通して大田先生に召しを与え、ご一家でATI神学校で大切な発展期に用いて下さいました。教室、寮、図書館等が建てられ神学校らしく整えられました。続いて主は、高橋めぐみ先生を召し、お遣わし下さり、社会もYPPIIの団体も大変な激動の時代に大きな支えとして用いて下さいました。そのお働きは、このインドネシア、ミッションで報告されてきている通りです。



一番左が安海師、左から２番目が故安東師

ATI神学校は、今日に至るまでカリマンタンの隅々まで、卒業生を送り出しているだけではなく、リバイバルの流れの中にあるインドネシア中の教会/地域に、そして、宣教師として世界の国々に遣わされ、この日本にも五名の卒業生が、インドネシア福音教会(JEC傘下)で牧師として奉仕しています。

最後に、このATI神学校と日本の教会との関わりに、大きな主の摂理を感じざるを得ないことです。かつて、この西カリマンタンは、日本軍によって三千人余りの現地の人が虐殺された地です。日本軍は赤道に沿っての土地の資源開発権利を得るなら、道路を建設してやると交渉したといわれる地です。そして、日本の宣教師の血が流された地です。安東宣教師の遺体が、軍の特別車で空港まで運ばれた翌日の地方紙に写真入りでこうありました。「日本人によって幾千のインドネシア人の血が流された地に、日本人の宣教師の血が流された。」私達は戦争の賠償やお詫びで宣教するのではありません。しかし、現地のメディアが報じる様に歴史の事実です。誰の血／犠牲の故かはともかく、主イエス様の貴い血潮のゆえに贖われ、唯一の贖罪のその恵みを伝えるのです。そのために今も多くの宣教師の涙と血が流がされているのが宣教です。この西カリマンタンとの関わりには、主の特別な御関心と摂理を感じるのは、歴史が語っています。その中に少しでも関わらせていただく恵みが、このインドネシア、ミッションを通して続けられますことは何と意味深いことでしょう。(続く)

安海師(中央)と学生だった前校長の
パムジ師(安海師の右斜め後ろ)

西カリマンタン宣教の歴史　Vol.3

インドネシア福音教会主任牧師
初代西カリマンタン宣教師
安海靖郎師

「インドネシア福音教会(GIII) 」の導き

17年間奉仕したインドネシアを離れ、1989年6月に本帰国しました。それは、インドネシア政府が10年以上インドネシア在住外国人のビザは、延期せずという決定をしたからです。いわゆる、日本の明治時代のような、国産化政策の一環です。強く心を引かれる思いと、高校生になって日本に残している二人の娘のことを考えると、これも主の御配慮かという思いで帰国したのです。

しかし、それまでも何度も経験してきたように「どうして？」と行き詰ったり、働きがストップしそうになった時、主は道を備え、人の思いを超えた計画にに導かれたように、今回も主の御計画が備えられておりました。帰国後については、先ずアンテオケ宣教会事務局の働き、そして、宣教的な教会の形成、できたら千人教会をなどと夢をいだいておりました。

しかし、主は、新しい主のお働きを備えておられたのです。インドネシア人が増えてきていた東京に、その数年前に、月一度の超教派のインドネシア語礼拝が生まれておりました。私も一時帰国の際にクリスマス礼拝などに招かれ奉仕したことがありました。その交わりの中心をになっていた二家族、大使館関係者と石油公団駐在員が、なんと、かってジャカルタ夜間神学校で教えた人達だったのです。彼らいわく、東京にはすでにカトリックのインドネシア語礼拝はあるが、プロテスタント礼拝はまだ無い。安海先生が、帰国したのはそのために違いないと言うのです。私も不思議な主の御手の導きを感じました。そして、事は一気に進みました。帰国後二ヶ月で、新宿南口にあったコンピューター学院の一室で、インドネシア語主日礼拝がスタートしたのです。32年前です。

7～8名で始まった東京インドネシア福音教会(TFKI)は、日本で初めてのインドネシア語プロテスタント教会として人数も増え、礼拝場所も渋谷のHI-BAセンター、池袋の大手の塾の大教室を経て今日神田の韓国YMCA ホテルのホールに導かれています。さらに来日するインドネシア人、関係者が増え、各地に伝道所が生まれ教会となりました。

安海先生ご夫妻　東京インドネシア福音教会にて

今、七教会(牧会者の居る自立教会一東京、茨城、三重群馬、愛知、大阪)と八つの伝道所です。八人のインドネシア人牧師と楽しく牧会させていただいております。そして、この八人のうち、ベテランの四人はかのカリマンタンのATI神学校卒業生です。大田先生、めぐみ先生の奉仕の実です。そして、今、インドネシア福音教会GIIIはJECの傘下に置いて頂き、牧師招聘、不動産取得手続き等お世話になっています。

東京インドネシア福音教会のみなさん

カリマンタンの牧師不足の為として始まったATI神学校、今、卒業生が全国のみならずたくさん宣教師として世界各地に遣わされております。ATI神学校スタートに関わらせて頂いたものとして、振り返りますと夢のようです。今だに、千人には届きませんが、GIII教会は七組のインドネシア人宣教師とトルコ宣教の末冨宣教師をサポートする宣教スピリットに富んだ群れとなりました。主は、ヴィジョンを与え、それを実現される主です。(終)

安海先生（前列中央）と日本のインドネシア教会の牧師たち
（前列は、皆ATI神学校卒業生です）